

無線の呼び声に耳を澄ます。セツシヨ^エンE、配置についたか、と。すぐさまチームメイトの応答が返ってくる。エコー1、エコー2、準備完了。全部で七名。声に緊張が漂っている。

ジャック・L・ステイカーは粗末な壁に身体をはりつけてその時を待った。暗い室内だった。全身黒色の戦闘服に、防毒マスクを着用し、特殊弾を装填した自動小銃を携えているステイカーは、手元に視線を落とした。無関係の人間からすれば、暗闇の中でバックライトも付けずに何を確認しているのかと不思議がられるだろうが、彼には時刻が見えている。手首から浮かび上がるようにデジタル数値が表示され、予定の時間までもう間もなくであることを教えてくれた。目を上げると、他にも見えるものがある。壁の向こう側で赤くピンされた物体と残弾数。まるでモニター画面を通して周囲を見ているようだが、コンタクトレンズ型の補助デバイスによって現実環境が拡張しているのだ。しかし、ステイカーにとってそれはあまり好ましいものではなかった。ハントの言う通り、眼球という人間の一番繊細な部位に直接取り付ける、ということが気

に入らない。それに複合型拡張現実〈MAR〉の感覚にはいまだに慣れないし、これからも慣れるものではないだろう。必要だからやっているだけだ。現に戦闘において役に立つ。

〈Edgar、配置についたか〉

〈Edgar、準備完了〉

〈セツシヨ^{オールド・イン・ボジッ}ンE、全員準備完了〉

〈了解。全員準備完了〉

グリップを握る手を、ぐっと持ち上げる。

〈待機せよ〉

呼吸音がマスクの中で反響する。

〈待機せよ〉

……

〈突入〉

ステイカーは踏み出した。前方に照準を合わせて、コンクリート壁に挟まれた通路を素早く進んでいく。自動小銃についているマグライトがみすばらしい室内を照らし出す。視覚上に表示されている索敵システム〈EAP〉によれば——彼らはエドガーだとかポー先生だとか呼んでいるが——敵の数は十体だ。画面のいた

るところで赤くピンされている。特に近い対象は視覚の上でわかりやすかった。つまり、いま最も脅威になる相手は浮かび上がるように強く発光し、まもなく接触することを告げている。位置はステイカーの頭を何個も飛び越えた上方だった。EAPが正確に機能しているのなら、そいつは二階の床下で泥酔したように伸びているか……

ステイカーは室内に銃口を上に向ける。スチールラックを置いた手狭な倉庫だった。ラックは壁に沿っている。脅威を見つけ即座にダブルタップした。

——天井にはりついているのだ。

通常の自動小銃とは異なる、硬質な金属音が激しく空気を叩く。対象はまもなく天井に釘付けになった。ボールペンサイズのスパイク弾が敵を仕留めたのだ。耳長の小鬼顔は、残酷な拷問に遭わされたかのように合板の頭部に針山を作っていた。それから心臓を撃つ。脅威を排除したステイカーは、腰から銀煙弾を取り出し、室内に転がす。また通路に戻って移動し始めた頃には、背後で輝くガスが吹き出し、外まであふれているはずだ。

〈一体射殺〉

〈了解、一体射殺〉

〈一階、ダイニング、クリア〉

〈二階、寝室、クリア〉

〈一階、通路、死体を確認〉

ステイカーは同じ手順を踏んで、一体、また一体と小鬼の標本作成に集中する。簡易に造られた模擬室内にカカシ相手にスパイク弾を撃ちこんでいった。床、天井、壁、部屋の隅……非現実的な強襲作戦だった。だが、これはステイカー自身が過去の実戦で遭遇した敵の配置を模している。

〈行け、行け、行け！ 止まるな！ 動き続けろ！

おい、お前——〉

ハントのがなり声が無線越しに聞こえてくる。きっと相手の肩を掴んでいるか、さもなければ胸倉を引き寄せて精一杯に凄んでいるはずだ。

〈簡単に死体に近づくな！ 銀煙弾が先だ！ 死にたくなければ訓練どおりにやるんだ！ わかったか！ さあ行け！〉

〈二階、移動する〉

へ接敵！ 二階、通路！

きらめくガスが煙るなか、いくつかの部屋を確保し終えて、ステイカーは両開きの扉の前にたどり着いた。内部は作戦報告室と同じ程度の広さだ。EAPは三体をピンしている。距離にして五メートル範囲内だった。無論、正面突入は危険を伴う。だが、通常戦闘であれば、これほど接近していればどこにしようと相手はこちらの位置を認識しているはずなので、どこから突入しようと同じことだった。それに彼は現在、単独襲撃中なので、扉や壁を破壊してくれる仲間は一人もいないし、装備も限定的だった。

閃光手榴弾を取り出したステイカーは、安全装置を抜いて素早く窓から投げ入れる。衝撃に備えた。破裂すると同時になだれ込む。燃え尽きたマグネシウムの薄い煙の中、合板に、金髪女のポスターが貼られ、文字通り棒立ちになっているのが見えた。その真隣りに一体。人質の腰のあたりに小鬼の頭部がある。銃弾を食らわせた。金属を叩き折るような音を立てて、スパイク弾が宙に展開される。発射の衝撃で釘を一段伸ばすためそのような音がするのだ。それは小鬼の顔に襲い

かかり、正確に口の中に命中する。カカシの小鬼は壁まで吹っ飛び、ピンされていた。続けざま心臓を狙って貫く。二度と起き上がれない。もう一体。パイプ椅子に男の人質。その隣。ダブルタップ。床に釘付けになる。心臓を貫く。化物を殺すには銀の杭が必要だ。最後の一体。彼は刹那の判断でその場を転がり危機を脱した。部屋の隅にいたカカシが高速で彼に襲いかかってきたのだ。実際は、敵を模した標的が、天井のレールに添ってこちらに突進してきただけなのだが――

ステイカーは背中から手斧を抜いて一息に横に飛んだ。すっぱりと切断された小鬼の頭が、反対の壁まで飛んでいく。切断面は高熱に燃やされたように赤く焼いていた。すぐさま空いている方の手で小銃を構え、心臓を狙う。全弾命中。後方にたたらを踏んでいた足を止め、あとになって必要以上に距離を取っていたことに気付くのだが――静寂の中、肩で息を整える自分の呼吸音が、まるで別の誰かが発した音のように聞こえていた。照明がパツとついて周囲が明るくなった。銃を下ろす。もう終わったのだ。

無線では激しい交戦のやり取りが聞こえている。ど

うやら、対象DPは通路でセクションEと遭遇したあと天井裏に逃げて、それから別の部屋にいた構成員に襲いかかったらしい。ステイカーは首を振った。その場に自分がいないことに腹が立つ思いがした。

「駄目だ、近すぎて撃てない！ 一階に連れて行かれない！」

「俺がやる！ エコー7、移動する！」

「一階東の窓だ！ 俺はここだ！ 窓から出ようとしている！」

「エコー5、エコー6、反対側から追い立てろ。どこもかしこも銀の煙だ。やつにもう逃げ場はない！」

「了解した！」

「見えた！」

……

ステイカーは、床から五〇センチほど底上げされた通路から降りて、模擬訓練場を後にした。振り返って改めて見れば、巨大なドールハウスのようだった。地下施設に造ったものにしては満足できるものだ。彼が床に降り立つとすぐに換気が始まる。同時に天井から鈎付きワイヤーが下りてきて壁を次々と解体していく。

壁とはいえコンクリートの部分は表面だけで、内部は木の板だった。まあまあ重量があるものの、人間でも持ち運べる重さだ。それが組み立て式の本棚のように合わさり、さきほどの模擬場を作っていたというわけだ。状況によって部屋の数や広さを自由に設定できるし、標的と人質、そして簡単なギミックまで機械で設置することが可能だった。便利意外のなんであろう。しかも、たいそう金がかかった代物だ。昔であれば、自分たちでベニヤ板とネジを使って大工仕事をしていたものだ。

天井クレーンが壊れた壁をせっせと持ち上げて修理場送りに行っているのを見ると、ドールハウスの奥で防弾仕様の透明の箱の中で監視員が座っているのが見えた。ここの規則として、一人で訓練を行ってはいけないので、ステイカーが友人を連れてきたのだった。充分に換気が終わった頃に、彼はガスマスクをはいでそちらに向かう。監視役の男はポータブルゲームに熱中していた。彼は室内に乗り込み、

「成績は？」

相手はちらっとゲーム画面から目を上げ、モニター

を見た。そこには何も表示されていなかった。にもか
かわらず、

「はいはい、満点満点」

こいつ、自分のゲームのスコアを言っていないか？

ステイカーは仕方なくキーを叩いてタイムと射殺数
の整合を取った。及第点といったところだった。しか
し、タイムは以前より3秒劣っているのが気になる。
念の為、彼は相手に聞いてみた。

「なあ、俺のこと見てくれてたか？」

「いいや」

ステイカーはため息をはいた。「やる前に言っただ
ろ？ 問題があるかもしれないから、何かあれば指摘
してくれて。お前の協力が必要なんだ」

無線では状況が終わったことを報告している。エコー
7、レイ・ダウリングが対象DPを完全に沈黙させた。
軽傷者一名、死者は無し。これから情報を洗い出すよ
うだ。もう心配はいらないはずだった。

監視役の友人はポータブルゲームを一時停止させて
ステイカーを見た。

「ジェイ君よお、俺は休憩中にこんなところに駆り出さ

れてるんだぜ。本人がどうしても言うからさ。と
ころで俺がどんな仕事をやってるか知ってる？ 食堂
清掃兼、シーツ洗い兼、お前たちの下着洗い兼、電気
工事兼、訓練壁修理係なんだよ。そんな俺に一体なに
がわかるっていうんだ？ それに、見ろよ、あの、あ
れを」と、友人は向こうの方を顎で示した。そこには、
修理待ちの安壁が天井近くに収納されている。「大量に
仕事を増やしやがって」

広大な地下訓練施設は静かだった。射撃場、強襲訓
練場、運動施設……等々、非常に充実している場所だ。
しかし、実のところ二人以外に誰もいない。

がらんどうの訓練施設だった。

ステイカーは言った。

「わかった。あとで録画映像を見る。自分でな」

「それがいいね」

「ところでうちのセクションに加わる気は？」

「ないよ。とても忙しい」

「そうだよな」と、ステイカーはにこりともせず、監
視室を出て行った。まったくむかつく野郎だ。怒りな
がらスリングを身体から外し、訓練場を後にしようと

する。その時、出口に人が立っていることに彼は気が付いた。

「良い成績ね、ステイカー。一人で十体を相手にして」
紺色のスーツを着たアグニエシユカ・ポランスキーが彼を待っていた。「復帰が早くて驚いたわ。肩の調子はどう？」

「悪くない」と、ステイカーは肩を疎めて見せた。「久しぶりだな、シス。欧州から帰ってきたばかりか？」

「ええ、つい先程ね。怒涛のスケジュールでどうなることかと……」

相手は四十年代後半の、黒い目が聡明に輝く女性だ。仲間たちの間では彼女はシスとか、ビッグ・シスターなどと呼ばれている。本名はポーランド系の名目前だが、彼女の人種構成は非常に複雑だった。外見は黒人女性なので彼女をアフリカ出身だと思ふ人間が多いが、国籍はイタリアである。彼女のような者は別に珍しくはない。ここにはそんな人間が大半だった。

連れ立って訓練場を出た二人は、通路を歩き、武器保管室に入る。木柵とアクリル板で作られた半個室型の場所だ。ガン・マニアなら泣いて喜ぶところだった。

必要なものは必要なだけ手に入れることができるので各人贅沢な暮らしぶりである。もっとも、敵に有効な銃器は限られてくるのだが。ステイカーは自分の区画に入り、身に着けた装備を取り外していく。その外で、ポランスキーは腕を組んで彼を眺めていた。

「セツションEのことは聞いている？」

「ああ。なにもかも」ステイカーは特殊弾倉を小銃から外した。「何を見つけたかは、まだ知らないが」

ポランスキーは軽く頷く。

「どう思う？ 作戦に出すには早すぎた？」

どう答えるか迷うところだ。ハントとダウリングのプロ二名がいなければ同胞が一人、確実に死んでいたのは間違いない。彼は手に持っていた銃とマガジンを作業台に置いてポランスキーを見る。

「まだなんとも言えない。チームに参加したあの二人に聞くのが一番いいだろうな」

「正直に言って欲しいわ。あなただから聞いているの」
「少なくとも、今日は一つ結果を出した。俺なら前に進ませる」

ポランスキーはまた頷いて、「私と同意見ね」と言っ

た。彼女は頬に手を当て小さく息をつく。「セッションEの全員が、あなたぐらいの技能だったらいいんだけど……」

「多額の税金が必要だな」

ポランスキーは彼の皮肉に微笑んだ。

「元レジメントの人間と比べるものじゃなかったわね」

「もういいだろう」ステイカーは首を振った。「俺は粗悪品のクズだった」

それは失礼した、とでも言うようにポランスキーは眉を上げた。

「で、そっちは？ Bチームに同行してたって聞いている」

彼女は口を引き結んだ。どう見ても腹を立てている。

「ええ、対象DPは完全に消えてなくなっただわ。倉庫ごと消え失せてくれたのよ。これがどういふことかなたにわかる？」

「いや……」彼は頬骨を指でこすってから、片付けの続きを再開した。だいたい予想がついていたものの彼女をあまり刺激しなくなかったので、黙っておくことにする。

「後で速報を見てご覧なさい。ひとときの間だけ、楽しくなれるから」

「そういえばBチームの連中の姿が見えないな。あいつらは無事なのか？」

「無事だから問題なんでしょう」ポランスキーはブロンズ色の額に指を当てる。「罰として特別な指示を出したわ。自力の帰国には時間がかかるから」

どうもやつらは相当のことをしてかしたらしい。俄然、ニュースを見るのが楽しみになってきた。

スチール製のロッカーを閉めてステイカーは彼女を振り返る。

「俺から言えることは、セッションBの調教はEの作戦よりも大仕事になるってことだよ」

彼女はため息をついた。

「頭が痛むわ。問題児はあなたたち三人だけで充分なの」

「酷いな、シス」

それから二人は保管室を出てエレベーターに向かった。道中、いろいろなことを話した。今月の予算のこととか、人員のこととか、機関の運営に関わる内容だ。

彼は主に訓練や戦闘行為にかかる計画に携わっていたのでポランスキーとはそういう話をいつもする。しかし、そろそろ雑務は誰かに譲ってしまったかった。彼の本音はこうだ。訓練計画はともかくとして、帳簿の残高を気にすることは俺の仕事じゃない。

「——とにかく、今は我慢して付き合ってもらおうわ」
せかせかと前を歩きながら彼女は言った。ステイカーは、地上行きのボタンを押す相手を見下ろし、
「わかっているよ、ビッグ・シス。だけど、一番の問題はそこじゃない」

「^{サンクチェアリ}聖域」ポランスキーの黒い瞳が向けられる。

「……私がいけない間に何か変わったことは？」

「なにもない。何週間もずっと同じだ」

一瞬、彼女の目が深刻そうにかけるのをステイカーは見逃さなかった。すぐに毅然としたものに戻るのだが。

「わかった」ポランスキーは続けて、「あなたも知っているとおりに、最近のR2クラブの行動が気になる。聖域にはなんともしようがないけど、なんとかしないといけないわ。セクションEの件は真剣に検討しておい

て」

エレベーターが地上に到着した。ポランスキーは真つ先に下りてステイカーを振り返る。「でないと私達、もうおしまいよ」

「了解、ビッグ・シス……」

忙しなく遠ざかっていくポランスキーの足音が、自動扉に遮られていく。ステイカーは壁に背中をあずけた。はやくシャワーを浴びたくて仕方がない。胸に覚える小さな不安感も同時に洗い流してしまいたかった。各地に散らばっている政治的に中立なNGO組織の中核になる、この《ヘアダム骨》は致命的な問題を抱えている。

慢性的な人手不足なのだ。

「……チーフ。車内禁煙ですよ」

がたごとと揺られながらレイ・ダウリングは目を上げた。フルサイズの改造バンの中では、武装した人間が窮屈に詰め込まれていた。が、ある男の周りだけは

心なしか座席に余裕があった。オークリー社製のヘジュリエット、サングラスをかけた大男だ。年齢は三〇前半。茶色の髪はくせが強く、短髪にしても鳥の巣のようだった。顎の周りの無精髭が目立っている。ウィリアム・ハント——ダウリングの元上司だった。ずっとチーフと呼んでいたのでそのままの呼び名を続けている。

ハントは無言で煙草をもみ消して窓をぴしゃりと閉めた。

「開けといてくださいよ。こもるから」

「うるさいぞ、レイ」

やれやれと首を振って、周りに目を向けた。笑ってくれるやつが一人くらいはいるかと思っただが、そんな人間はいなかった。なんだか全員落ち込んでいる。出発前は、「俺に成果をとられるなよ」と言い合うほどやる気が漲っていたのに、今は悪魔に魂を抜かれてしまったかのようだ。

そうなのかもしれない、とレイ・ダウリングは思った。初戦は誰でも憂鬱になる。怖気づき、こんな仕事を続けられるのだろうかと自分を疑う。俺も最初はそ

うだった。

チーフは相手に期待をしすぎなんだ。俺なんて、やつらを見た時はその場を飛んで悲鳴を上げた。

そんなことを考えながらダウリングは言う。もう少しねばってみてもいいかなと思っただけだ。

「それに怖がられますよ。もうあんたに絡むやつが一人もいなくなるかも」

「ほっとけ。孤独に飽きたら海に出るだけだ」

一週間前まで「くそつたれの海」とかなんとか言っていたような気がするが。ハントの機嫌がしばらく直りそうにないことを改めて確認したダウリングは、耳にイヤホンをつめて音楽プレイヤーを再生した。帰ったらチーズ・ブリトーを食べたかった。疲れていたし、腹が減っていた。

ヘアダムの骨に帰還したセッションEはその場で三々五々に散っていった。三〇分後に作戦報告室に集まるよう指示を出したのでまた顔を合わすことになる。しかし、ハントとダウリングの二人はフル装備のまま報告室に向かった。後報告の前に話しておきたい相手がいた。ハントが扉を開けて二人してのし

と中に入ると、そいつは空席のプラスチック椅子に囲まれるように座り、紅茶を飲んでるところだった。真鍮色の髪に緑色の目をした若い男だ。ダウリングの目から見ても端正な顔立ちだが、どこことなく粗野な雰囲気がある。ジャック・L・ステイカー。そんな彼女の友人は現在、左腕と右足に太い石膏ギプスをはめている。その表面にはタイムとキル数、そして「ぼくを任務に連れて行って」とピンクのマジックで汚く書かれていた。

ハントがサングラス越しにダウリングと目を合わせて彼に聞いた。

「……俺たちが一日いない間に何があったんだ？」

ステイカーは無言でギプスをはいで床にぼとりと落とす。「こうしているとデスクワークが減るんだ」

「お気の毒様」ダウリングは笑った。相変わらずずこのイギリス人はおかしなやつだ。

ステイカーはハロー・キティのプリントされたマグをテーブルに置いて文句を言う。

「おい、俺は言われたとおりに訓練の目標を達成したんだぞ。何か言うことがあるんじゃないか？」

ダウリングとハントはにやつと笑った。

『復帰おめでとう』——三人は満足そうに固く握手をする。

「それで、どうだった？」

マグに口をつけてステイカーが伺う。二人とも、彼が無線を全部聞いていたことは知っていた。

「最悪だ」とハントは椅子を引き寄せて腰をおろした。ダウリングも銃を隣に置いて、隣に座る。何か食べるものがないかとあたりを見回していたら、ステイカーがきゅうりのサンドウィッチとカップを渡してくれた。サンドウィッチはいいとして、またあのべとべとに甘いお茶を飲まされるのかと思ったが、喉が渴いていたので我慢した。

ハントは前かがみになって続ける。

「最初に嫌な予感があった。車内で青ざめているやつがいるから、これは何かあったなと思って聞いてみた。全カートリッジに非殺傷模擬弾を詰めて実戦にやってきたそうだ」

「すごいな。大物だ」とステイカー。「それでそいつはどうしたんだ？」

ハントはグローブを取っていじりながら言う。

「半分俺のをやった。で、俺はその時耳元で囁いた。

『無駄撃ちはするな。かといって撃ち渋るな。もししくじれば……間違ひなく腹ペコ野郎に食われるだろうが、その前に俺がお前を殺してやる』

ふーむ、とステイカーは唸ってダウリングに視線をちらと投げた。彼もハントの機嫌の悪さを理解したらしい。ダウリングは肩をすくめてそれに応えた。

「他にもある。死体に不用意に近づいたのと、訓練通りに突入手順を踏まなかったのと……外に出すには早すぎたんだ」とダウリング。「あいつらにしてはよくやっていると思う。だけど、俺にはまだ足りない」

「本戦は？」

「無理だな」

きっぱりと言ってから、ウィリアム・ハントは声の調子を落として付け加えた。「……まあ、少なくとも、三ヶ月は」

「そうですかね。俺は選抜からもう一度やりなおさせたいくらいだ」

「お前、俺より厳しいな」ハントはダウリングを見た。

サングラスの奥の目の表情はわからないが、眉は困っているように下がっていた。「さすがにそこまで考えていない」

二人を静かに見比べて、おやおやとステイカーは思った。機関で一番悪態をつくハントよりも、一見おだやかなダウリングの方がキツイ現実を言ってくれる。無理もない。彼はいまだ現役の軍人なのだから。嫌でも悪い部分が目につくのだろう。

ステイカーはそれとなく告げる。「なあ、とても言いにくいんだが……実はさっき、レイたちの突入と同時に単独強襲訓練をしたが、俺のほうが早く終わった」それを聞いてハントは落胆していた。訓練を積んだ相手とはいえ、病み上がりの人間の単独行動に劣るとは。レイ・ダウリングは首を浅く振る。

「最初から無茶な話だった。BUD/Sをやればすぐにわかる。エコーの連中は誰もヘルウィークを越えられないだろうな。俺たちの基準で考えれば……」

「わかった。全部言わなくてもいい。だけどな、兄弟、今は仕方ねえだろう。俺達の手札は少ないんだから。紛争地の人間を教育しているようなもんだ。荒れ地で

どうやって人を集める？ まあ、強みがあるならひとつだけだ。やる気は誰よりもある。目には見えないが、大事なものだ」

「その証明が必要か？」とステイカー。二人は少し考えた。ダウリングが口を開く。「ああ、必要だ。困難を乗り越えれば自信になる。それに、どんなときも心の支えになる」

「考えておこう。いつかきつとそう言うだろうと思っ
てたんだ。セクションAは一時解散することになるだ
ろうが——」

それから三人はEチームの方針について話し合った。
機関でも実戦経験が豊富な人間はとりわけこの三人だっ
た。というか、三人以外に戦闘プロフェッショナルが
いなかった。どれだけ人手に困っているかわかっても
らえるだろうか。聖^{サンクチュアリ}域が不在のいま、自分たちでや
れることをやるしかなかった。

彼らが満足するまで話し終わった頃、アグニエシュ
カ・ポランスキーとセクションEの構成員、それに何
名か補佐の人間が作戦報告室に入ってきたので、急に
騒がしくなった。ポランスキーは鋭く手を叩いて注目

を集める。

「さあ、始めましょう。もう準備は整ってるわね？」

ポランスキー狼の群れをまとめる頭領のような存在
だった。いつも鋭く、きびきびしている。三人とも彼
女を振り返り、

「……俺たちも早く独り立ちしないといけないな」と、
ハントが小さくぼやいた。